

全日本仮装大賞への道  
ウルトラセブン編



尚美学園大学 定平研究室3年  
中村麻美

「今年もやるぞ！」  
定平先生のその一言からこの戦いは始まった。

私たち3年は初めての挑戦。  
4年生の先輩は前年に引き続き2度目の挑戦。  
院生は3度目の挑戦だった。

全日本仮装大賞への挑戦。

ゼミに入る前から、このゼミが仮装大賞に過去に挑んでいることは  
学校全体が知っていることだったので、もちろん私も知っていた。

しかしゼミに入ってしばらく、今年はやらないとの方針が出た。  
先輩方から仮装大賞への挑戦は並大抵のものでないと聞いていたので  
少し安心したような、そんな気持ちだった。

しかし。

「今年もやるぞ！」

…そういうことになった。

どうしてそうなったのか、先生は説明してくれた。

簡単に言えば、今の私たちならいけると思ったから、だそうだ。

数々のゼミでのプロジェクトをみんなで乗り越えてきたのを見て  
挑戦しないのはもったいないと思った、と言う。

その話を聞いて、心の中に“使命感”のようなものが生まれた。  
きっと私だけでなくゼミ生みんなの心の中に生まれたと思う。

「やるからには絶対に優勝したい！」

そう思った。

信用して期待してくれている先生に応えたいと思った。



そう決まった日から、戦いは始まった。

まず企画会議。

先生の意向で今回はウルトラセブンをやることになった。

何が必要なのか。

誰が何をやるのか。

仕掛けはどういうものを作るのか。

まず何をしたらいいのか。

幾度かの話し合いの中で、主役のセブンを誰がやるのか、そのオーディションをすることになった。

意外性を出すために、女子がやろうということになった。

軽くみんなの前でひとりひとり演技などをした。

みんなで誰がいいか投票した。

…結果、なんと私がやることになったのだ。



そして次々と各役割が決まっていた。

衣装、大道具、演出、演者。  
それぞれみんなが役職を背負った。

衣装のデザイン、武器の設計、大道具の製作。  
みんな模索しながら毎日準備に追われた。



毎日朝9時に学校に集まる日々が続いた。  
授業の合間の空き時間はすべて準備に費やした。

夜は学校の許す限り遅くまで作業をした。



衣装も大道具も、完成したかと思ったら綻んで直して…  
それを何度も何度も繰り返した。

せっかく作ってもダメになったり使わなくなったり。

でもその作業は決して無駄ではなかったと私は思っている。  
みんなで力を合わせて問題に向き合うことは大変だったけど  
それと同時にとても楽しくもあった！







いろいろな物の制作作業もしながら、演技の練習も始まった。

先述した通り、私は主役のセブンになったので  
最も重要と言っても過言ではない立場にあった。

もちろんプレッシャーもあったが、楽しくもあった！





実際の舞台の大きさを想定して、室外で練習することもあった。  
ほかの学生に見られることもあったがみんな応援してくれた。

生徒だけでなく、ほかの先生たちも応援し、アドバイスもしてくれた。





連日、朝早くから夜遅くまで練習は続いた。  
一日一日を無駄にしないように、予選まで時間もない中で  
かなり濃密に毎日練習した。

自分たちの持っている力の限界をフルに出せるように  
妥協せずに一回の練習を大切にした。

練習と並行して制作もまだまだ続いていた。





…そして、予選当日。

連日培ってきたものをすべて出し切るために日テレに向かった。  
誰もがみんな自分たちの力を信じていた。

「必ず優勝する」

まだ予選の段階だが、みんなそのくらいの気合いだった。

…結果は、納得のいくものではなかった。

でも私がこの挑戦を通して学んだことは数えきれません。  
結果は残せなかったけれど、挑戦して本当によかったと思います。

このチャンスをくれた定平先生とゼミ生のみんなに感謝します！

大変だったけど、とても楽しかった。  
他の人が経験できないことをできて、本当によかった。

この挑戦を、私はきっと一生忘れない。

学んだことを今後の人生に活かしていきたいと思います。

ウルトラセブンになってよかったです！



end



The END

